

222

山本有三集

日本文學全集

27

新潮社



Printed in Japan ©

日本文學全集 27 山本有三集

昭和三十五年二月十五日發行
昭和三十八年六月三十日八刷

著者 山本有三

編者 河盛好藏

発行者 佐藤亮一

印刷者 佐藤精亮

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(34)七二 振替東京八〇一

印刷所 二光印刷株式会社

製本 神田加藤製本所

本文用紙 十条製紙株式会社

函貼・カバー 特種製紙株式会社

表紙布地 望月株式会社

定価 二九〇円

〈落丁・乱丁本はお取替えいたしません〉

目次

波

妻

子

父

眞実一路

注 解
年 譜
解 說

河盛好藏

五〇九

四九五

四三三

三七

二七

八

五

五

山本有三集

波

妻

一ノ一

行介（コースケ）はいつもの停留所でおりました。おりるとき、帽子に手をやらなくてはならないほど、風が強かった。

彼は赤っ茶けた風に押されて歩いて行った。ときどき、紙くずや、こつばなぞが、トンボがえりをしながら、彼のズボンのあいだをすりぬけて、ころがって行った。

行介はオーバーのえりを立てていたけれども、それ

でも、カラーの下まで、つめたい空気が流れこんできた。そのうえ、どうかすると、クギでも投げつけられるように、おゝ粒の砂がバラ／＼と、彼のえり首に落ちてきた。

彼は、横丁にはいったら、いくらか風がよけられるだろう、と思った。急いで、うちのほうへ曲がる最初の横丁を曲がった。しかし、しばらくしてから、「きようは寒いから、帰りに肉でも買ってこよう。」けさ、出がけに、妻にそう言ったことを思いだした。

そうだ。肉を買って行ってやらなくては。彼は、また電車どおりに引返して、突きあたりの肉やにはいった。

板まえばが肉を切っているあいだ、行介は厚いマナイタの前に突っ立って、ホーチョーの動くききをぼんやり追いかけていた。なま肉のにおいが鼻を打って、彼の胃ぶくろを驚くほど波だたせた。

マナイタの上に斜に落ちているゆう日が、鋭い刃ものにあたって反射すると、ちょうど油でもはねた時のように、天じょうや、肉をぶらさげである大きなガラス戸ダナに、きらっ、きらっ、ちいさい光をはねか

せた。

突然、ふわっとしたものが、ひざのあたりにからみついた。彼はびっくりして下を見た。ふる新聞が風に吹きまкруられて、飛んできたのだ。なんのことはない、木の根かたに落ち葉が吹き寄せられるように、彼の足もととは、一時の吹きだまりになったのだ。

「こんなところに突っ立っていると、ざまがないや。」
心の中でつぶやきながら、彼はいま／＼しそうに新聞を往来にけとぼした。しかし、べつとりと張りついたようになって、ふる新聞はなかく、足から離れなかつた。彼はしかたがなしに、ほこりだらけの紙を指でつまんで、かざしにも放してやった。ほろ／＼に破れた、大きな紙きりは、また往来をころがって行つた。肉やの店さきに立つたびに、いつも思うことだが、どうも、この、待っているあいだくらい、まの悪いものはなかつた。

板まえば切つた肉を竹の皮の上に薄くのばして、丁寧にならべていた。それから、ハカリの上に載せて、少しばかりの肉をたしたり、へらしたりしていた。行介はお預けをくつた犬のように、黙ってそれをながめ

ていた。

「見並（ミナミ）君。」

肩のところで声がした。ふり向くと、一つのエ顔に突きあつた。園田（ソノダ）だつた。

行介はちよつとしよげたが、向こうが笑っているの
で、彼もてれ隠しに、ほ／＼えんで見せるよりほかはなかつた。

「ごちそうだな。」

「いやあ、とんだところを見つかつちやつたな。」

一ノ二

「あい変わらずだね。」

園田の顔には笑いがまだ残っていた。

「何があい変わらずだい。」

行介はおつかぶせて言った。「あい変わらずのろいね。」「あい変わらず女房孝行だね。」「あい変わらず……」園田のあい変わらずに負けていたら、どんなことになるかわからない、と思つた。

「いや、あい変わらず気がきいてるってんだよ。」

「ふん。」

「おれがくることを察して、牛肉を買っておこうなぞは、感心だよ。」

「たぶん、そうくるだろうと思っていた。おい、心配しなくてもいいよ。君にはコマ切れをたくさん買っておいだ。」

「コマ切れ、コマ切れか。」

「何を言っているんだい。みつともない。」

「おい。——女房にコマ切れを買って帰りけり。ってのは、どうだい。」

「どうもうるさくってかなわないな、迷句をひねくるやつが、そばにいと。」

「しかし、実感があってなかく、いいだろう。」

「うん、たび／＼コマ切れを買いつけてると見えて、その点はさすがだね。」

「まだあんなことを言つてやがる。もういい加減に降参しろよ。」

「はゝゝゝ。」

「お待ち遠さま。」という声が響いた。そして、竹の皮つつみが行介の前に突き出された。彼はそれを受け取ると、園田とつれ立って肉やの店を出た。

「だが、ぼくがあすこにいたこと、よくわかったね。」
「なあに、君の姿は三丁もさきからわかっていた。」
「どうして。」

「ぼくはこの道をやつてきたんだもの、つきあたりの店に、君の丸まった背なかが出っぱつていりゃ、いやでも目につくじゃないか。おれは道々考えてきたんだが、どうもなんだね、ネコ背つてやつは、なかく／＼句になりにくいね。」

「バカにするな。じゃ、君は、ぼくのところへ行つたのかい。」

「うん、もう帰っているころだと思つて。」

「それなら、待つていてくれればいいのに。」

「おれもそうしようと思つたんだが、だれもいなかつたもんだからね……」

「かまやしない。あがりこんで待つてりゃいいじゃないか。ほかのうちじゃあるまいし。」

「ところが、戸がしまっているんだ。引っぱつてみたけれど、あかなかつたから、しかたがない、帰つてきたのだ。」

「そうか、そりゃ失敬した。じゃ、女房、どっかへ買

い物に出たんだらう。」

きょうは土曜日だし、ちようど園田もやってきたところだから、久しぶりでひと口やりたいと思つて、行介は途中、取りつけのさか屋に寄つて酒を頼み、うちに帰つた。うちは、園田が言うように、戸がしまつていた。妻はまだ帰つていないらしい。彼は裏ぐちにまわつて、あま戸のかけ金をはずした。

一ノ三

なかはまっ暗だつた。

行介は手さぐりで電灯を探し、スイッチをひねつた。それから、急いで玄関に行つて、格子（コーシ）とあま戸をあけた。

「いや、お待ちどお。」

「ほんとうにお待ち遠さまだ。なんだね、肉やのmanaイタの前に立たされるのも、いい凶じゃないが、戸のしまつたうちの前に、ちよこなんと突っ立つてるのも、あんまりありがたいものじゃないね。」

園田は、へらず口をたゞきながらあがつてきた。

行介は、なが火バチの横にすわろうとすると、煮え

たぎつた鉄ピンが、重たいフタをバタリ／＼押しあげているので、彼は立つたまゝ、あわてて鉄ピンをわきにおろした。「戸じまりをして、外に出て行くくらいなら、火をいけて行けばいいのに。」腹の中で、彼はるすの妻にこごとを言つた。

しかし、じつを言うと、赤々とおこつてゐる火は、吹きつつあらしの中を、冷えきつて帰つてきたからだには、この上もなくうれいものだつた。ふたりは火バチの上に手をかざしながら話し合つた。

園田がやつてきた用むきは、金のことだつた。まだ来月と思つてゐた細君のお産が、急におとゝいあつたものだから、てんてこ舞いをしてしまつた。で、五十円か、三十円ばかりほしい、と言ふのだつた。ふたりは、しよつちゆう、このくらの金を貸したり、借りたりしている仲だつた。園田はずばらのように見えて、案外かたい男で、金銭でまぢがいのあつたことはなかつた。ことにおもしろいのは、それを返しにくるとき、味の素だとか、塩せんべいだとか、その利息に相当するくらいのもの、いつもきつと持つてくることだつた。行介も、借りたときは、やはりそうすることにしていた。

園田の話は事情が事情だし、それに、ちょうど三十
四ばかり手もとにあつたから、さつそく用だてること
にした。行介はその話が一段落つくと、台どころに立
つて行つて、ネズミイラズだの、戸ダナだのを、しき
りにガタピシいわせた。

「何を見つけてるんだい。」

「おかしいな。どこへしまいかんじまったのかしら。

どうも女房がいないと、しょうがないな。」

「おい、ごちそうなら、また、ゆっくりなりにくるよ。」

「まあ、そんなことを言わないで、ぼくがせつかく買
つてきたんだから、肉を突つついて行けよ。」

「しかし、奥さんがいないところだからね……」

「きょうはバカに遠慮するじゃないか。」

「そういうわけでもないが、金を借りたり、ごちそう
になつたりしちゃ、少し話がうま過ぎるからな。」

「いやなことを言うやつだな。そんなことを言つて
ひまに、いいから酒でもつけといてくれよ。」

今しがた小僧が持ってきた酒のトックリを、園田の
前に押しやった。

波 「驚いた。細君がゐるすだと、おれのほうにまで雷がお

つこつてくる。」

「つまらないことを言うなよ。」

「しかたがない。細君が帰つてくるまで、おかん番を
つとめてやろう。」

「それだ。恩をきせてから飲もうつてんだから、君は

太い料けんだよ。」

「なに、そんなことはありゃしないが……」

「ナベ、ナベ、ナベと。いったい、どこへ入れちまや
がったのかな。」

「なんだい、牛ナベかい。」

「うん、困つたな。こゝになければと——」

「そのぐあいじゃ、こゝのうちでは、めつたに牛肉な
んか食わないと見えるな。」

「飲まないさきからその調子じゃ、飲んだら何を言ひ
だすかわかりゃしない。」

「おい、いったい、そんなに飲ませるつもりかい。」

「すぐそんなことを言う。だから、酒のみはいやし
つてんだよ。」

「そうものをはっきり言うもんじゃない。酒がはいら
ないうちに、まっかになつてしまふじゃないか。」

一ノ四

「へんなもんだな。自分のうちでいながら、台どころ
ときたら、どこに何があるんだか、さっぱりわかりや
しない。」

「実際なんだね。いるときには、さほども思わないも
のだが、いないとなると、これで、不自由なものだね。」

「おい、つまらない親切なんか、よしてくれよ。」

「だが、そういうもんじゃないか、いったい、細君な
んてものは……」

「あつた、あつた。なあんだ、こんなところに突っこ
んであつたんだ。」

米ビツの横に二寸ばかりあきがある、その狭いあい
だに、牛ナベはむき出しのまま立てかけてあつた。

「そうか。じゃ、いよく君のしいれてきた牛肉にあ
りつけるわけだね。」

「今までは、どうなることかと案じていたって、言や
しないか。はゝゝゝ、さあ、これでネギさえあれば文
句はないぞ。ところで、ネギはと……」

行介は台どころのあげ板を開いて、下をのぞいた。

暗いなかにも白く光ったものが十本ばかりそり返って
いた。彼はそれをみんな取りだして水で洗い、あぶなっ
かしい手つきをしながら、ザクリ／＼切りはじめた。

こうしてネギが買つてあるところを見ると、妻は彼
が肉を買つてくることを、忘れているものとは思えな
い。しかし、今もつて帰つてこないというのは、どう
したわけなのだろう。彼の帰つてくる時間は充分承知
のはずだし、それに、その時刻に、うちをるすにする
というようなことは、今までも、ついでなかつたこ
とだけに、行介はホーチョーを動かしていながら、
考えは絶えずそこに走っていた。

「おい／＼、カフスがぬれるよ。」

園田の声で、行介の考えは断ち切られた。

「洋服を着かえたらいいじゃないか。」

「いや、めんどくさい。もうじきだよ。」

「それじゃ、細君のエプロンを前にかけるんだね。そ
うして、ついでに、あたまに白い帽子をのつけるんだ。」

「バカにするな。」

「おい、新まえのコックさん、指を切らないように頼
むよ。」

「大丈夫だよ。だが、こんなことをしていると、君と自炊していたところが思い出されるね。」

「あのとときもさ、君はよく指を切ったぜ。おかげで、ぼくは、なんど血ぞめのタクアンを食わされたかしれやしない。」

「しかし、君がいくらかでも血のめぐりがよくなつたのは、あれからだ、と思や腹も立たないだろう。」

「へん、あきれてものも言えやしない。——そろくおチョーシをつけ始めようかね。」

「なんだい。まだやらなかつたのかい。」

「まだやらなかつたかつて、牛ナベが見つかからないうちから、おかんをしちゃ、つき過ぎちまうじゃないか。」

「なるほど、大きにそうだね。——おい、トックリは茶ダンスにはいつているぜ。」

「如才はないよ。もうちゃあんと出してある。」

園田はトックリに酒を移して、しずかに鉄びんのなかに沈めた。

「え、君。この、ポチャリという音は、なんとも言えないね。」

「そうだね。」

「そうだねは、話せないな。なんじゃないか、芝居で言や、これは幕あきの木みたいなものだ。こいつがボコリだの、ポチャリだのときた日には、酒の味はなくなつちまうからね。おれは女房にだつて、こいつばかりは任せはしないよ。——女房つてば、奥がたはバカに遅いじゃないか。」

一ノ五

「女房なんかいなくなつて、かまやしないよ。さあ、できた。」

行介は切つたネギをサラにもつて、洗つた牛ナベといつしよに茶のまに運んだ。

やがて、肉がジユク／＼煮えだして、火バチの上は急に活気づいてきた。

「酒もついたし、肉も煮えてきたし、もう、なんにも言うところはないや。」

二、三杯ですぐとろんとしてしまふ行介は、目がねの曇りを気にして、度の強い近眼鏡をはずし、息を吹きかけては、しきりにハンケチでふきはじめた。

「これで女房さえ帰つてくりや、だろう。」

園田はゆるやかに、杯をくちびるのところに持つて行きながら、少し目じりをさげて、行介の顔をのぞいた。

「なあに、女房なんか、どうだっていいさ。」

「なんとか言つてら。」

「全くだよ。」

「そんなことを言うと、向こうじゃ、もう帰つてまいりませんよ、と言つてくるぞ。」

「ところが、そんなのはちがうんだからね。」

「あきれた。こりゃ手ばなしだ。」

「まあ、なんにもありませんけれども、どうか充分めしあがつてください、つて、ところかね。おい、君。こっちのほうが煮えているぜ。」

「おれはもうたくさんだよ。おらあ帰るよ。バカくしい。」

「さようでもございませうが、これは手まえが買つてまいった肉でございますし、こちらは手まえが刻んだ……」

腹の底には何かつめたいものがよどんでいながら、行介はへんにはしゃぎたかつた。しかし、冗談をいっ

ているうちに、自分でも空しくなつて、途中で急にやめてしまった。

園田は帯のあいだから時計を出した。行介はそれを見ると、おどすように、

「おい、帰るのはまだ早いぞ。」

「う、うん。」なま返事をしながら、園田はなお時計をながめていた。

「もう少ししろよ。」

「う、うん。——しかし遅いな。」

「まだそんな時間じゃないだろう。」

「いや、奥さんがさ。——買い物にしちゃ、少しおそ過ぎるじゃないか。」

「……………」

「どこへ行つたか、心あたりはないのかい。」

「そうだね。」

「おい、隣へ行って聞いてこいよ。ちよつとお尋ねしますが、手まえどもの家内はどこにまいりましたろうつて。」

「なんだ。本気にしていると、すぐちゃかしやがる。」

「しかし、ほんとだよ。何かことづけがあるかもしれ

ないぜ。」

「いいよ。女房なんか、いたって、いなくたって。君さえいれば。さあ、一杯いこう。」

「おい、おれを女房と取っちがえちゃ困るよ。ぼくは奥がたが帰ってくりゃ、立ちどころに引き取ろうって人間なんだからね。」

「そう帰るくっておどかすなよ。」

「いや、そういうわけじゃないけれど、なにしろ、うちのほうがなんだからね……」

「あ、そうか。はムム。——そんなに子どももってかわいものかね。」

一ノ六

「まあ、持ってみろよ。」

「いやにおやじぶるな。」

「しかしね、君……」

「驚いたな。これが当年の園田だと思うと。」

「まあ、なんとでも言うがいいさ。人間、子どもを持たないうちは、まだ人生の半分しかわからないんだよ。その意味で、君なんかは半人まえぐらいの値うちつき

りないんだぜ。結婚して、まだやっと一年だろう。」

「おい、はじめておやじになったって、そう感ばるなよ。」

「いや、べつに威ばりゃしないが、なんだよ、君、子どももってものは……」

「子ども、子どもって、そんなに珍しがることはないじゃないか。ぼくなんか、子どもなら、なんにんでも持っているよ。」

「なんにんでも？」

「うム。」

「おい、ほんとうの話かい。」

「ほんとうさ。学校へ行けば、子どもなんかうよくしている。」

「なあんだ。小学校の生徒か。君はたちが悪いよ。すぐ人をつぐから。」

「いや、かついだんじゃない。まじめな話だ。」

「バカくしい。学校の子どもなんか、なんにんあつたって、しかたがないじゃないか。」

「そんなことはないさ。」

「いや、君がなんと言ったって、他人の子じゃだめだ

よ。自分の子でなくっちゃ。どうも、小学校の先生なんて、しようがないね。こんなことが、わからないんだから。」

「何がしようがないことがあるものか。自分の子だの、他人の子だのと、区別をつけるようじゃ、学校の教師はつとまらないよ。」

「そりゃ教壇に立った時の話だ。まあ、自分の子どもを持ってみるよ。どんなもんだか。」

「いや、そんなものは当分まっぴらだね。」

「はゝゝゝゝ。実際、女房さえ食わせられないんだからね。——おや、もう九時になる。こりゃ驚いた。君、すまないが、ぼく、失敬するよ。何しろ、赤んぼうと産婦とおきっぱなしなんだからね。」

「そうか。そりゃ悪いことをしたな。あんまり引きとめちゃって。」

「なあにく。じゃ、奥さんが帰ったら、どうかよろしく。」

「近いうちに、赤ちゃんを見せてもらいに行くよ。」

「うん、是非やってきてくれたまえ。」

園田が帰ったら、家のなかは急にひっそりとしてし

まった。行介はつまらなそうに、食器の取り散らされているなかに、ごろりと横になった。そして、今まで園田がすわっていた座ぶとんを、寝たまゝ腕をのぼして引っぱり寄せ、二つに折って、あたまの下にあてがった。牛ナベは、つゆが切れたとみえて、ジイ／＼火バチの上でうなっていた。焦げつくような異臭が鼻を突いたけれども、彼は起きあがるうともしなかった。

そのとき、裏のほうで何かガチャガチャーンというはげしい音がした。妻が帰ってきたのかとも思ったが、それにしては、少しするど過ぎる物おとだった。隣の物ほしザオが吹き落とされたのかもしれない。外はあい変わらず風がひどいらしい。

一ノ七

行介は突然むっくり起きあがって、自分の机のところに行つた。彼女は急な用事でもできて、外出したのかもしれない。何か書いたものがおいてありやしないか、彼はそう思つて机の上を調べたけれども、いや、引きだしのなかまで調べたけれども、それらしいものは見あたらなかった。